

大学生時代になすべき二つのこと

みなさん、慶應大学への入学、おめでとう。また、ご列席のご家族の皆様に対しても、教職員を代表してお祝い申し上げます。

今日から始まる大学生としての生活に対して、皆さんは多いに期待し、胸を膨らませておられることでしょう。われわれ教職員も、皆さんの大学生活がそれぞれに充実したものとなり、そして社会が皆さんに期待する成果を、これからの四年間に挙げられんことを、心より念願しています。近年、われわれの平均寿命は、医学の向上によって著しく伸びています。しかし、これから始まるようとしている四年間の大学生活は、おそらく、皆さんのその後におけるどの四年間よりも、大きな人間的成長が見込める時期であり、また社会は諸君にそのことを期待しています。

先ほど鳥居塾長は「新しい時代を自分達の手で、そして自分達の力で作りだすことを考え続けてほしい」と諸君に言われました。われわれ教職員もまた、皆さんがこうした高いところざしを持ち続けることを願っています。そして、それと同時に、皆さんそれぞれが、自分が本当に得意とする分野、あるいは自信を持って進める「自分の道」を見つけ出してほしいと、期待しています。なぜなら、それは結局、皆さんが将来社会に対して持つ役割をより良く果たし、またより大きな貢献をしてゆく道でもあるからです。

これからの四年間は、このように社会からみても、そして皆さん自身にとっても貴重な、そして人生のただ一度限りの期間です。では、この時期をどう過ごすべきだろうか。私は、皆さんに二つのことを希望したい。

懸命な勉強

第一は、一生懸命に勉強してほしいことです。少し強い言葉でいえば、死に物狂いで勉強してほしい。

ここで「勉強する」という意味は、直接的には、授業に熱心に出席し、所定の教材をこなし、試験に自信を持って臨めるようにする、という意味ですが、それに加えて、幅広く読書をし、友人と議論をし、ものごとを深く自分で考えるなど、幅広く勉学に打込むことを指しています。

大学生にとって、勉強することは自明のことかもしれませんが、社会の変化テンポが

加速し、とくに国際化が一層進む状況のもとでは、あえてこの必要性を私は強調したい。諸君は大学卒業後、色々な仕事に携わるでしょうが、海外において仕事をする場合はもちろんのこと、日本国内において仕事をする場合でも、国際的な接触が一層増えるでしょう。とくに、地球を網の目のようにつつむインターネットのうえでは、国境は存在しないので、今後は地理的な居場所のいかんによらず、どのような仕事であれ国際的な関わりが自然と増えてきます。

そうしたグローバル化した社会で活動する場合、本当に意味を持ってくるのは、一つは専門的な深い知識です。もう一つは、ものごとに対する考え方や基本的な態度である、と私は思います。その場合、重要になるのは、自己を卑下することなくその尊厳を守り、そして何ごとも、自己の判断と責任のもとに行動する、という強い心を持っていることだと思います。

つまり、慶應義塾の教育理念である「独立自尊」です。これは、先ほど塾長のお話にもあったように、福沢先生が一〇〇年以上も前に掲げられた義塾のモットーですが、これこそ、国際化する日本社会、あるいは国際社会で活躍する人にとっても最も必要なことに他なりません。残念ながら、わたくし自身が学生時代を過ごした大学は慶應ではなく、この面での強い教育理念を掲げてはいなかったもので、この点諸君をうらやましく思います。

ただ、ここで強調しておきたいのは、自己の判断をしっかりと持つことができ、そして責任のある行動をとるには、まず自分についての自信が必要であり、それは結局、猛烈な勉強から生まれてくる以外にはない、という点であります。

諸君は「問題発見・解決型の教育」という言い方を耳にされたことがあるかと思いますが、これは、これは従来の「知識伝授型教育」（知識を教授から学生に伝えることを基本とする教育）とは対照的な新しい教育方針であり、湘南藤沢キャンパスを中心に掲げている新しい教育の考え方です。

猛烈な勉強の必要性は、こうした新しい教育についても同様に当てはまります。ただ、一部には誤解があるようです。つまり、「これまでに蓄積された研究成果にかかわらずあっていては、現代の問題を捉えることはできない。これまでの蓄積はむしろ邪魔になりかねない」という見方がそれです。こうした理解は正しいとはいえない、と私は思います。なぜなら、本当に重要な問題をとらえるうえでは、これまでの先人達が蓄積したものをまず猛烈に勉強し、自らの中に蓄積する、それがあるとき、いわば発火点に達する

かたちでひらめきが生まれる、というプロセスを採る以外にはないからです。

これこそが問題発見という意味です。勉強をしていない頭の中に、大きな意味を持つアイデアがある日、突然浮かび上がってくる、などということはありません。その意味で、「問題発見・解決型の教育」とは、学生に対して従来以上の勉強を求めるきびしい教育を意味するものです。

海外の多くの国では、中学、高校、大学と学年が進むほど、勉強の熾烈さが増してくるといわれています。本日、九月入学式に出席されている諸君は、とくに高校までは海外で生活したというケースも多いでしょうから、このことを自分自身の経験としてもうなずけるかと思えます。わたくしは、慶應義塾の教員になる前、海外のいくつかの大学で教壇に立っていましたが、とくに大学については、学生の勉学に対する熱意が際立っていたことが印象に残っています。諸君は、こうした海外の同世代と、いずれ協力する、あるいは交渉するなどの場面に出会うわけですから、彼らに十分伍して活躍しうる力を、これからの懸命な勉強によって蓄えてほしいと念願しています。

生涯付き合える友人の獲得

皆さんに希望したい第二のことは、一生付き合っていける友人を大学時代にぜひ得てほしいことです。

最近では、インターネットの発達により、直接顔を合わせたことがなくても、電子メール通信を介して、大へん心安い友人関係(いわばサイバースペース上の友人関係)ができるといった例も、さして珍しくはないようです。これは、技術革新が人間関係に影響を与える一つの興味ある現象です。

ただ、人間同士の深い関係や信頼関係が形成されるうえでは、目で見、耳で話を聞くなど、五つの感覚を総動員するかたちで、相手の人物全体を感じ取っていく、という過程が不可欠であり、そうしたことによって初めて、長く続く友人関係が養われるものです。このため、大学で毎日直接顔を合わせることができる仲間、あるいは友人関係は、インターネットの上で形成される友人関係からは決して得られない貴重な要素をもっています。

大学を卒業してから新しい友人を作ろうとしても、そこではどうしても各人が置かれた立場ないし利害がからんでくるので、純粋な友人関係はできにくいものです。これに対して、大学時代は、感受性が人生のうちで最も鋭敏であり、知性も伸びる時期です。ま

た勉学あるいはサークル活動を通して、多様な背景を持つ仲間と知りあいになれるので、生涯の友人が得られる条件がそろっています。

これからの四年間は、諸君にとって本当の友人を作る最後の貴重な機会です。波長の会う友人、あるいは波長は合わなくとも信頼できる友人を多く作ってください。それは、生涯の宝となります。

結 論

以上、皆さんには、懸命に勉強してほしいこと、そして一生付き合っていける友人を得てほしいこと、を述べました。われわれ教職員としては、履修カリキュラムの充実、情報通信設備の整備、あるいはサークル活動の支援など、色々な面において諸君がより有意義な大学生活を送れる環境になるよう、常々努力しているところです。

今から四年後に諸君が大学生活を振り返るとき、この伝統のある、そして誇るべき教育理念をもった大学で勉強し、ほんとうに充実した大学生活であった、と自信をもっていえるような生活となることを心より期待し、わたくしの祝辞といたします。

(大学入学式における教職員代表祝辞、二〇二〇年九月二十一日、
慶応義塾大学・三田キャンパス北新館ホール)